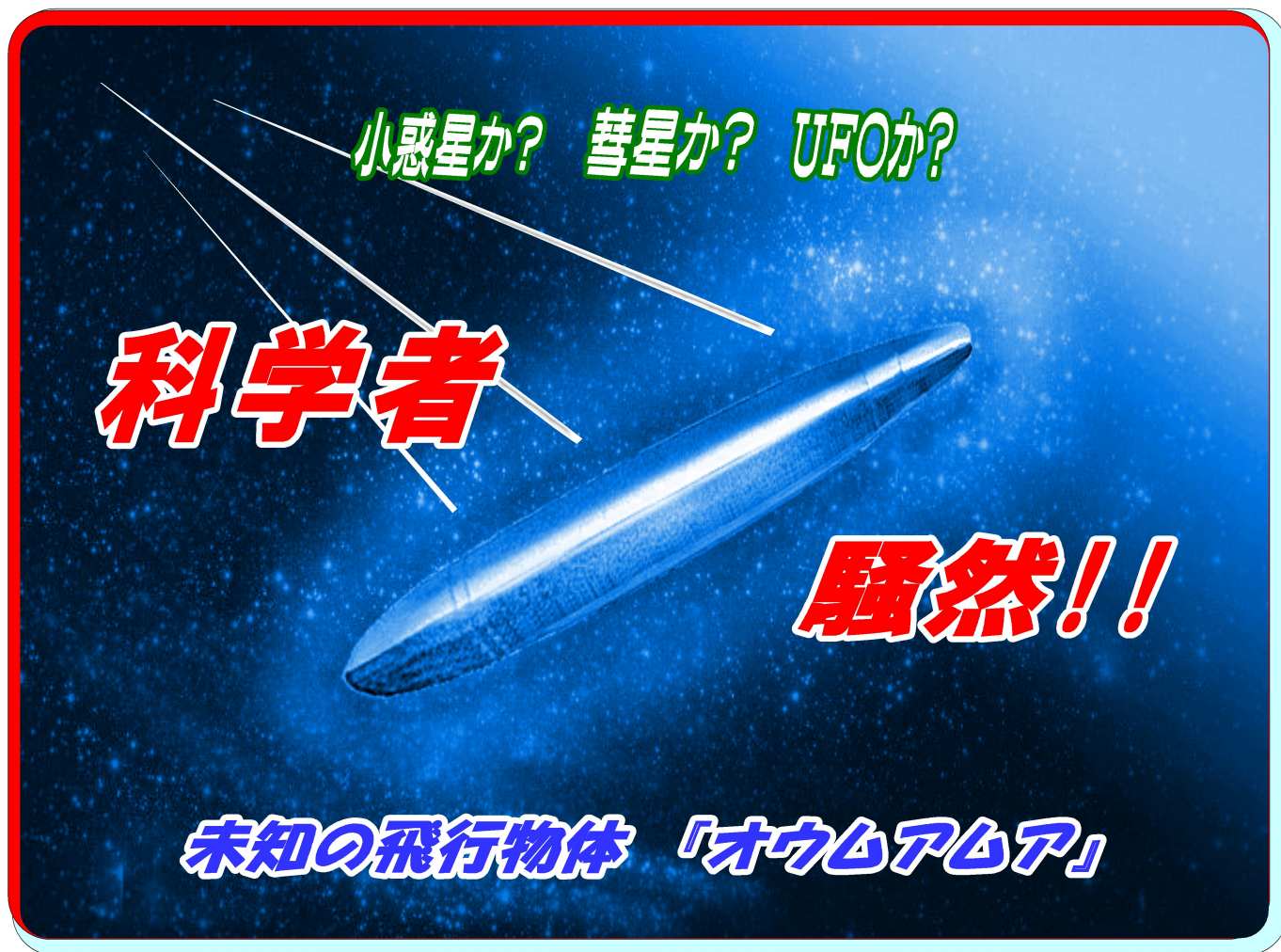




2017年10月19日宇宙を観測する研究者たちが騒然となる出来事が発生した。

地球に衝突する可能性のある小天体の発見を目的として建造された、ハワイ・マウイ島ハエアカラ山山頂にあるパンスターズ1望遠鏡が、西の空に白い線のように写る小天体を捉え記録していたのである。

ハワイ大学研究チームのロブ・ウェリク博士は、毎朝パンスターズ1から送られたデータをチェックするが、この日のリストの一番上にあった線のように写る天体、つまりその日一番地球に近づいた高速で移動している天体を発見し、前日のデータにも写っていることを確認、更にカナリア諸島で観測している仲間と呼びかけ新たなデータを入手し、この3つのデータから物体の驚くべき速度と軌道を割り出した。

通常太陽系内の惑星や彗星は、太陽の周りを楕円軌道などで回っているのだが、この物体は双曲線の軌道を描き、太陽系の上方から26km/秒の速さでやってきて、太陽をスイングバイして加速し、太陽系にある他の小惑星の倍以上の46km/秒という超高速で遠ざかったのである。

太陽の近くを通過したにも拘わらず、重力にとらえられることもなく、猛スピードで飛び去り戻ってくることはなく、その軌道から観測史上初の太陽系外から進入してきた物体と判明したという。

後のデータ分析により、この物体は2017年9月9日に近日点を通過、太陽からの距離は約3,710万km、同年10月14日地球から約2,400万kmの地点を通過したこともわかった。

ウェリク博士は所属するハワイ大学天文学

研究所のチームリーダーであるカレン・ミーチ教授に報告、ミーチ教授は直ちにハワイの3つの天文台とチリの2つの天文台に、この猛スピードで地球から遠ざかりつつある物体の観測に協力を依頼した。

チリのジェミニ南天文台の報告によると、この物体は約4時間弱の周期で光度の変化(明暗)を繰り返し、それぞれの光度の差は10倍以上であるという。

この観測史上初の太陽系外からの訪問者は、国際天文学連合により「1I/2017U1(“1”は世界初、“I”はInterstellar・恒星と恒星の間を飛行する天体、を意味する)」という符号が付けられ、固有名は第一発見者であるウェリク博士所属の研究チームリーダー・ミーチ教授によりハワイ語の「Oumuamua(オウムアムア)」と名付けられた。

“Ou”は遠方からの使い、“mua”は初めてを意味し、muaの繰り返しは強調する時の表現で、「最初の使者」という意味である。

オウムアムアのニュースは世界中のマスメディアで報じられ、ニュースウィークや科学ニュースウェブサイト・ライブサイエンスでも取り上げられた。

研究者たちはオウムアムアの観測を続行、

小惑星なのか、彗星なのか、UF0の可能性についても議論され、様々な意見が飛び交った。

以下に、軌道や速度だけにとどまらず、調査結果から導きだされた想定外の特徴を有すると推測されたオウムアムアに対する専門家の見解を参考にして、その概略を紹介する。

① 繰り返す光度の変化が、暗い状態の光度を1とすると、明るい状態の光度は10倍以上である。

明るさの変化は物体の形状の縦と横の長さの比率に変換することが可能である。

当初のデータでは縦:横が10:1のかなり細長い形状と推定した。

しかし、後の観測から巾約80m・長さ約800mの回転する葉巻形状物体の移動と修正。

最終的には巾約40m・長さ約400mの物体とさらに修正した。

光度の周期変化を当初約4時間弱としていたが、後にその周期変化を約7.3時間に変更した。

グループにより調査データも異なることから、オウムアムアの回転は短軸回転・長軸回転に加え上下の首振り運動

★ パン ス タ ー ズ 1 望 遠 鏡 ★

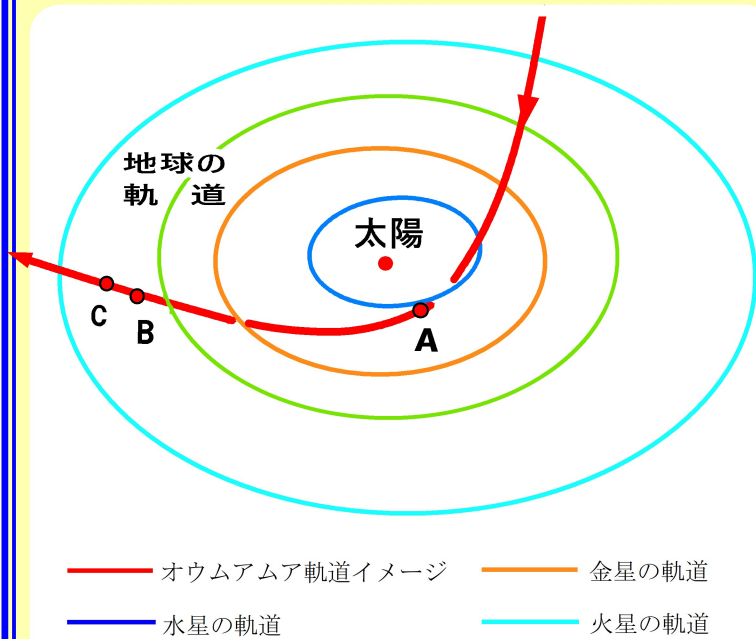


(<https://www.youtube.com/watch?v=xxmsi8rlytg>)

今回オウムアムアを発見したパンスタース1望遠鏡は、ハワイ・マウイ島のハエアカラ山山頂に設置された口径1.8mの望遠鏡で、地球に衝突する可能性のある地球近傍天体を発見することを第一目的に建造された。

このパンスタース1を含め、4台の望遠鏡が設置される予定で、将来的には4台の望遠鏡で継続的に宇宙を観測し、時間をあけて画像を撮影、それを比較することにより、小惑星や彗星を発見する計画である。

★ オウムアムア 軌道 イメージ ★



- A…近日点 2017年9月9日
太陽からの距離 約3,710万km
- B…地球最近点 2017年10月14日
地球からの距離 約2,400万km
- C…2017年10月19日予想地点
オウムアムアがパンスターズ1に捉えられ、観測が開始された

オウムアムアは、図のような双曲線の軌道を描き、太陽系の上方から26km/秒の速さでやってきて、太陽をスイングバイして加速、46km/秒という超高速で飛び去り、戻ってくることはなかった。

発見され観測が開始されたのは、地球に近づいたB地点から5日後のC地点であり、更に地球から遠ざかってからである。

「[https://ja.wikipedia.org/wiki/オウムアムア_\(恒星間天体\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/オウムアムア_(恒星間天体))」の図を参考にし作成

も行う複雑な回転であると推測した。

また、一部の専門家は光度から推定される形状は、回転に著しく左右されることから形状についても見直す必要が生じたとして、葉巻形状を扁平楕円形状に変更した。

- ② 太陽系の彗星に比べてオウムアムアの表面の光の反射率は約10倍高く、非常に光沢のある物体である。

物体の組成に起因するのか、元々そういう物質でできているか、或いは太陽に接近するにつれ表面の塵やほこりが吹き飛ばされ、氷や雪の層が現れた可能性が高い。

- ③ オウムアムアの正確な軌道を割り出すべくNASAのハッブル宇宙望遠鏡を用いて長時間追跡観測した結果、予測軌道とハッブルからもたらされた観測軌道との間にズレが生じた。

これはオウムアムアが太陽から遠去か

るにつれ徐々に減速状態となるが、逆に加速状態であることを示唆しており、重力の影響下にある時よりも速く移動している。

- ④ 彗星の最大の特徴であるテールを全く引いていない。

など、想定外の数々の特徴が専門家達を大いに困惑させて、オウムアムアの実体の正体は何であるのか、短期間ではそれを特定する結論には到達できなかったのである。

カリフォルニア大学バークレイ校が中心となり地球外生命体を探すプロジェクト「ブレークスルー・リッスン」が、人工物であれば必ず何らかの電波信号を発しているはずであるとして、バージニア州にあるグリーンバンク電波望遠鏡で8時間電波信号の有無を探ったが、人工的な信号は確認できず、収集した膨大なデータの分析は継続してはいるが、UFOではないという結論に至ったのである。

オウムアムアを発見したハワイの専門家チー

ムは、オウムアムアの長時間露出撮影を行っても彗星に見られる典型的なテールとガスが一切確認されていないことから、岩石などでできた小惑星ではないかと当初推察した。

また他の専門家は、2つの恒星からなる連星の複雑な重力により、弾き飛ばされた小惑星ではないかと推測した。

しかし、小惑星は主に岩石でできていて恒星の近くでつくられているはずで、恒星の重力の影響を強く受けることからそれを逃れるには強力な外部からの力が必要であり、太陽系に小惑星がやってくる確率は極めて小さく、彗星ではないかと推測した専門家もいた。

また、彗星だとする他の専門家は「テールを引かないのは塵の量が非常に少ないか、あるいはほとんど塵を含まない微量のガスだけを放出しているため、科学的特徴は検出されなかったのではないかな。

おそらくオウムアムアは表面が厚い炭素の層で覆われた氷でできた彗星であり、その炭素のコーティングにより太陽に近づいても中の氷がとけることなく通過できたのだろう」と結論付けている。

当初小惑星説を主張していたハワイの発見者チームも、上記③の観測結果から「なぜ加速しているのか、多様な可能性を検証して唯一導きだされた答えが、ガスは不検出だがガスを放出していると考えたと予測した軌道とのズレや加速も説明がつく。

太陽系の彗星のテールはシアン化物だが、シアン化物を使い切ったか、あるいは太陽系のものとは異なった未知のガスを噴出していた可能性もあり、そのためテールも引いていなかったのかもしれない。」とし、オウムアムアを彗星と特定した。

他方NASAが彗星のようにガスを噴出して加速したと結論付けたことで、専門家同士での

議論は彗星説で一見落着いたかのように見えたのである。

ところが、2018年11月12日、天文学と天体物理学の分野で最も学術論文に引用されるケースが多い権威ある学術雑誌「アストロフィジカル・ジャーナル・レターズ」に、米・ハーバード大学の天文学科長・エイブラハム・ローブ教授らが発表した「オウムアムアは地球外文明から意図的に地球付近に送られた探査機だったかもしれない」という論文が掲載されるに及び、UF0の存在を示唆する大ニュースとしてCNNを筆頭に、世界中のマスメディアが大々的に報じたのである。

ハーバード・スミソニアン天体物理学センターの所長をも兼務するローブ教授は、地球の生命の起源は他の天体にあるという「パンスペルミア説」を科学的に研究し、「UF0の存在を立証することがそれを造る地球外生命体の存在につながる」との見解を発表している。

ローブ教授に日本のメディアが取材したところ、「オウムアムアが太陽から遠ざかる際、想定より速い速度で遠ざかっている。

これは風が風の力で空を飛ぶように、太陽からの放射圧の力により移動したと考えたと説明できる。日本が2010年に打ち上げた「IKAROS」と同じ「ソーラーセイル」の仕組みではないかと考えられる。しかも、まるで生命体に操作されているような軌道をみせた。

長年観測してきた中でもオウムアムア以外ない。

突拍子もない話ではあるが、オウムアムアは異星人の文明により意図的に地球の近辺に送られた探査機の可能性はある。

ただし、オウムアムアから発する電波は確認されなかったのも、既に使命を終えた探査機の残骸である可能性もある。」との回答を

得たという。

また、「地球だけに宇宙で唯一の知的文明があると思うのは傲慢であり、私たちの住む太陽系の外からやってきたものを調べることが、生命の起源を知る手掛かりになると考える。」とも述べた。

以下、オウムアムアの観測結果がもたらした特徴と専門家たちの見解などについて行った、本誌の科学調査研究部門・SRD(Scientific Research Division)の検証である。

① 光度の明暗能力変化からオウムアムアが高速で複雑な回転をしながら移動しているという見解について。

周期的な光度の変化から回転していると推測したようだが、10:1の縦横比の物体の広い面積に太陽光が当たった時と、狭い面積に当たった時とでは、地球からの距離が遠いとはいえ、何らかの形状の変化があると考えられるが、観測写真(映像)では形状変化は認められず、光度のみが変化した。

オウムアムアが発見され観測が開始されたのは、近日点通過から一か月以上、地球に最接近してから5日後、つまりオウムアムアが

太陽でスイングバイして加速してからということになり、猛スピードで太陽・地球から遠ざかってからである。

専門家によると一週間のうちに明るさは10分の1に減少したという。

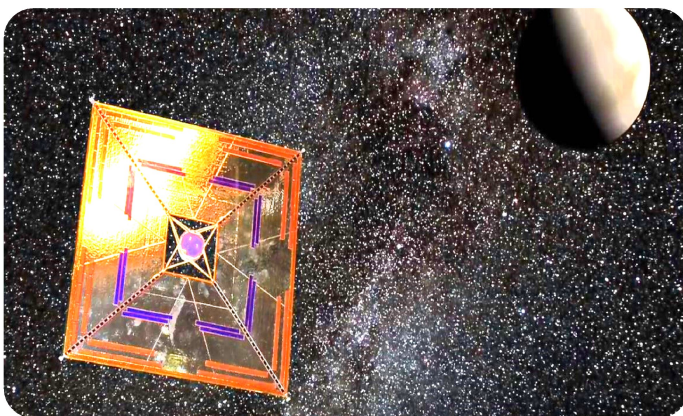
地球からの距離が遠いから形状の変化が認識できないというのなら、10分の1に光度が減少しているにも拘わらず、10倍もの光度の変化を認識しており、形状変化は認識できないものなのだろうか。

そこで、オウムアムアが回転していると仮定し、それに見立てた葉巻形状と扁平楕円形状の物体に、縦横比が10:1になるように反射板を取付け、物体から20m離れた地点にLEDハンドライト(LED28個・リフレクター径45mm)を置き、その円形状の物体に光源をあてて短軸回転させ、物体から約70m離れた地点のカメラのモニター越しにどのように見えるかの実験を試みた。

反射板も小さく光源も離れているので、モニターからはかろうじて視認できる状態であったが、形状の変化は確認できた。

しかし観測したパンスターズ1の口径は1.8mで、可視光の望遠鏡の規模としてはさほど

★ ソーラーセイルイメージ ★



<https://www.youtube.com/watch?v=8Q7TzLH2cRA>

ソーラーセイルは、太陽帆・ソーラー帆とも呼ばれ、薄膜鏡を巨大な帆として、太陽などの恒星から発せられる光やイオンなどを反射し、宇宙船の推力に変える器具である。

2010年に日本宇宙開発機構(JAXA)の打ち上げた「IKAROS」は、太陽光圧の力だけでの推進・姿勢制御は難しいため、セイルに薄膜太陽電池を付け、イオンエンジンとソーラーセイルを併用した「ソーラー電力セイル」実証機として、史上初の太陽帆航行に成功した。

エイブラハム・ローブ教授らは、「オウムアムアはソーラーセイルの仕組みを備えた、異星人の文明により意図的に地球の近辺に送られた探査機の可能性がある」との論文を発表し、UFOの実在を示唆する大ニュースとして、世界中のマスメディアが大々的に報じた。

大きくはなく解像度も低く、地球からオウムアムアまでの距離を考慮すると、距離約70mでは目の前で見ていた状況ともいえる。

それらを熟考すると、観測写真（映像）のように光度の変化だけで形状の変化は確認できない可能性は高い。

しかし、短軸回転だけさせた今回の実験での周期的な光度変化の見え方と、専門家の複雑な回転をしているとする見解の観測写真（映像）の見え方に違いはなかった。

複雑な回転をしているなら、短軸回転だけの時と光度変化の見え方が違うのではないだろうか。

また面積の広い部分は葉巻形状よりも扁平楕円形状の方が、より多くの光を反射するので、光度変化がわかりやすかった。

専門家による当初の発表から大きさは2分の1に、形状は葉巻形状から扁平楕円形状に、光度変化の周期に至っては4時間から7.3時間と3時間も大きく修正され、観測グループによっては光度変化の周期の数値が相違しているという観測結果まで出ている。

観測場所が異なっているとはいえ同時期に同じ物体の観測をしているわけであるから、光度変化の周期が何時間も変更されるのは理解しがたい。

また短軸回転・長軸回転に加え上下の首振り運動もしていたという地球科学の尺度で説明しようとする、奇妙奇天烈な見解に終始せざるを得なくなるのである。

結果、物体の大きさを当初の2分の1に変更し、形状も葉巻形状から10倍もの光度変化がわかりやすい扁平楕円形状へと修正することとなり、観測データがもたらした数々の想定外の物体の特徴を説明付けるべく、専門家が故意にこじつけたとも推察できなくもないのである。

専門家たちの見解は、オウムアムアに探査機を送り込み至近距離で観測したわけではなく、望遠鏡で形状や回転している様を確認できたわけでもない。

観測データをあくまでも地球科学の視点から分析、推測したものであるから彼らの結論が正解であるとは限らず、当然矛盾も生じてくることになる。

これらの事を考え合わせると、オウムアムアの周期的な光度の変化と観測グループにより光度変化の周期が異なる結果は、複雑な回転によるものではなく、物体その物が発光していると考えた方が自然であり、地球人類側に何らかの「シグナル」を送る意図があったと推察できるのである。

② 表面の光の反射率が太陽系の彗星より10倍も高く、非常に光沢のある物体であるという専門家の見解について

彗星説を唱える専門家は、オウムアムアの表面は、厚い炭素（カーボン）で覆れていると推測しているが、カーボンで覆われた物体に高い反射率があるだろうか。

炭素はカーボンブラックと呼ばれるほど黒色で反射率は低いのである。

表面の塵やほこりが飛ばされて中の氷の層が現れたために反射率が高いのなら、太陽に近づいた時点で、中の氷が解けだすかバラバラに砕けることも考えられる。

元々、非常に光沢のある物質でできた自然物ではないものと想定すれば説明はつくのである。

③④ 軌道のズレと加速していた事に関する見解及びテールを引いていない事について

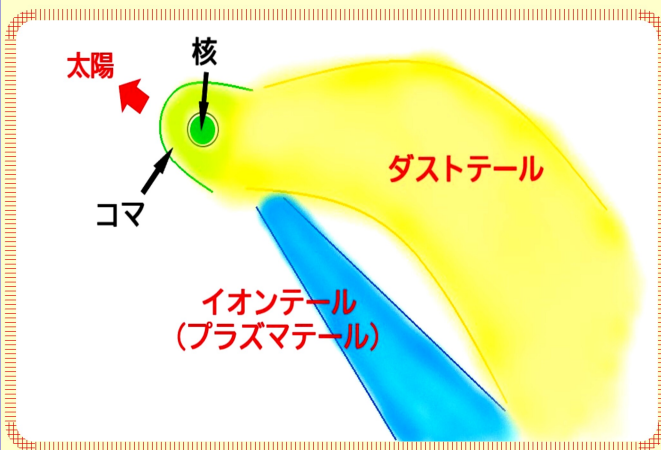
ガスは一切確認されなかったが太陽を離れる時の軌道の変化と加速を説明するため、「ガスは噴出していた、太陽系外から飛来した天体なので、噴出していたガスも未知のも

★ ハレー 彗星 (1986年) ★



<https://www.youtube.com/watch?v=2XawLA2E09c>

★ 彗星の構造図 ★



※上記のURL(ハレー彗星)の図を参考に作成

彗星は核・コマ・テールの3つに分けられ、更にテールはダスト(塵)テールとイオンテール(プラズマテール)に分けられる。

核は「汚れた雪玉」に例えられる氷と固体微粒子(塵)でできていると考えられている。

彗星が太陽に近づくと、核からガスと塵が放出され、核の周りにコマを形成する。

コマは太陽からの放射圧と太陽風により、太陽と反対の方向に2種類のテールを引く。

太陽系内の彗星のテールには、シアン化物が含まれており、青く見えることが多い。

専門家はオウムアムアは太陽系外から飛来した彗星で、シアン化物を使い切ったか、未知のガスを噴出していたため、コマやテールが観測されなかった可能性があるとしたが、加速し続ける程のガスの噴出があるのなら、わずかでもコマの形成やテールを引くなどの現象が確認されるはずである。

ので確認されず、テールも引いていなかったのかもしれない」とは、専門家らしからぬ見解であり、オウムアムアは彗星であるとの結論ありきの意図的見解ではなかろうか。

彗星から噴出するガスが、彗星の推進力のように働くことは考えにくく、ガスを噴出したとしても、加速し続けるほどの推進力をもっているとは考えられないのである。

ましてや、彗星説を唱える専門家が解説しているように、テールを引かないほどの微量のガスが噴出していたとしても、その微量のガスが加速し続ける推進力になるように、都合の良い場所からのみ噴出し、彼らが想定外の加速に戸惑い何度も計算し直したという結果になるだろうか。

仮に40×400mもの物体を、太陽の重力にとらえられず加速させ続ける程のガスが出ていたとするなら、それが未知のガスだったとしても、太陽に近づいた時点で「コマ」と呼ばれる彗星核の周囲を取り巻く星雲状のガスの形成やテールを引くなどの現象がわずかでも確認されるはずである。

彗星はその軌道により、楕円軌道を持ち太陽を周期的に周回する周期彗星と、放物線軌道あるいは双曲線軌道を持ち太陽を周回することなく飛び出し、二度と戻らない非周期彗星に分類される。

オウムアムアが彗星だと仮定して、この分類で考えるなら非周期彗星となる。

非周期彗星は確かに太陽などの近くを通過する際、その重力を利用して探査機などが運動方向と速度を変更する技術・スイングバイのように加速することがあるが、その後は惑星の重力の作用などで徐々に減速し加速し続けることは不可能に近い。

それは探査機のように何らかの推進装置を搭載しているわけではないので、自力で加速

し続けることができないからなのである。

専門家たちは予想と異なる軌道をたどったのもガスが出ていたとすれば説明がつくとしているが、ガスが一切確認できなかったという結果が出ていることから、予想と異なる軌道を描き、且つ加速して飛び去ったのなら、その物自体に推進装置が備わっていたと考えるのが自然であろう。

当然、小惑星も加速し続けることはない。

また、ブレークスルー・リッスン・プロジェクトが発表した、人工物であるなら発してしめるべき電波信号が確認できなかったが故の「UF0ではない」とする結論も、地球科学の尺度での判断である。

地球外生命体を探すプロジェクトならば地球科学の範疇を越えた大局的視野での検証が必須であり、電波信号の有無で結論を導き出すのはあまりにも検証視野が狭く、早計過ぎるのではないだろうか。

電波信号が確認できなくとも人工物である可能性は十分に残されており、未知のガスならぬ未知の電波であったが故に地球の計測機器では捉えられなかったという論理も成り立つのである。

UF0の特殊飛行しかり、彼らの卓越したテクノロジーを地球科学で理解することは極めて難しく、今後も地球科学の尺度で電波信号の有無を探り人工物か否かの判断をするのであれば、残念ながら地球外生命体を発見する多くのチャンスを逃しかねないのである。

過去のUF0サイティングリポートを精査すると、超スピード飛行・ジグザグ飛行・瞬間移動・鋭角ターン・瞬間停止など、地球上の航空機では到底不可能な行動が多く報告されている。

それらの特殊な行動から推察して、地球の科学技術を遥かに凌駕した飛行物体であるこ

とは明らかなのである。

様々な特徴を総合的に考察すると、オウムアムアは小惑星でも彗星でもなく、地球科学の常識を超える推進装置を備えた航空機、すなわち「UF0」であった可能性が極めて高いとの結論に至った。

オウムアムアは、天文学・天体物理学の権威である多くの専門家たちによって観測されたにも拘わらず、地球科学の範疇でのみの検討に終始した結果、ローブ教授らのUF0説には懐疑的な科学者が少なくなく、彗星であるという結論に落ち着いたことは甚だ残念なことであった。

これまでも科学者はUF0の存在自体が、航空機・雲・星の誤認、ロケットや人工衛星の残骸、或いは流星や火球などの自然現象だと地球科学で故意にこじつけて否定的見解を発表してきた。

確かに地球科学で解明可能な物もあるが、戦中のフー・ファイターも含めて解明不可能な飛行物体の存在を過去のUF0サイティングリポート、及び米国のプロジェクト・ブルーブックなどが証明している。

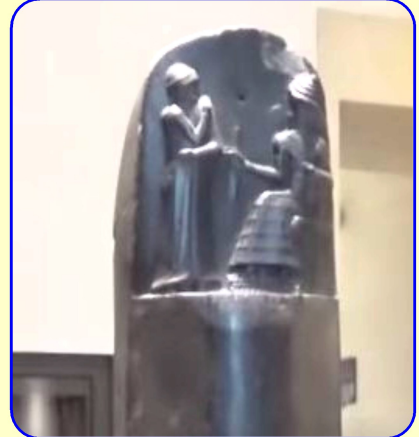
私たちは、そのUF0が遥かな古代から地球を訪れ、今日に至っているその膨大な痕跡を遺跡や伝説・古文書・聖典などの中に見出すことができる。

例えば古代遺跡には、円文・多重円文・有翼円盤・太陽の舟・太陽の車輪・有翼人像などのピクチャとしてのUF0や宇宙来訪者が描かれている。

また世界中の民族や種族の伝説・聖典には、天から降り立った神(太陽神)が民族に生活様式や文化的・人間的生き方などを教導する姿や律法を授ける姿が描かれている。

ハンムラビ法典碑の上部には、古代バビロ

★ ハンムラビ法典碑 ★



<https://www.youtube.com/watch?v=RbV3hGcPDRM>

ハンムラビ法典は、過剰な報復を禁じ、正義と平等、弱者(孤児と寡婦)の救済に重点をおく、古代バビロニアの法典である。

この法典は、ハンムラビ王が太陽神シャマシュとコンタクトし授けられたもので、その時の様子がハンムラビ法典碑上部にレリーフとして遺されている。

太陽神であり、正義の神でもあるシャマシュから授かったハンムラビ法典には、「人々に正義を与えるため」の282条の法律が記されており、法典

碑の下部に楔形文字で刻まれている。

しかし、現代の専門家たちは、地球上の学問の中での解釈をするため、実際にハンムラビ王がシャマシュとコンタクトし授かった、という見解にはならず、「何人にも平等に恩恵を与える太陽と遵守すべき正義を、擬人化した神であるシャマシュから授かったものとした」との解釈になり、実際にあった宇宙側と地球側のコンタクトを事実としてとらえることができないのである。

ニアのハンムラビ王が太陽神シャマシュとコンタクトし、ハンムラビ法典を授けられた様子がレリーフとして遺されている。

しかし、考古学や民俗学などの多くの学者たちは、古代は太陽崇拝であるから遺跡などの壁画は太陽であるという。

そして伝説・聖典などに登場する天降った神々を太陽と擬人化して、太陽がもたらした恩恵に感謝した物語だと結論付ける。

今回も多く専門家たちがUF0と遭遇するという絶好の機会だったにも拘わらず、地球科学に固執してその存在を否定することとなったが、他方UF0の可能性を示唆してその存在を公然と認めた宇宙問題のエキスパートたるローブ教授らの勇気ある行動は、十分に称賛に値するのである。

なお且つそれが論文形式で発表され、世界中のマスメディアがそれを報じるという意義深い事件となった。

地球は宇宙の孤児ではなく、核と廃棄物に汚染された地球だけに知的文明が存在するという誤てる考えを一掃しなければ、この地球に未来はないのである。

人類の生き方は遥かな古代より太陽神を介して宇宙より指し示されているのである。

例えUF0がその雄姿を現そうとも、地球の科学を盲信する科学者たちには何一つ解明することはできないし、地球上に遺されたUF0の痕跡も現状の学者たちには理解不能と言わざるを得ないのである。

それらは、地球規模で発生した古代の事象を宇宙的視点から、多様な学問(文化人類学・民俗学・民族学・考古学・天文学・地球物理学等々)を統合して考察する地球最先端の学問である『UFOLOGY(宇宙科学体系)』を人間的視点から修得しなければ、何人であろうともUF0・宇宙人問題を理解、解明することは不可能なのである。

〈N.S〉

第 30 回札幌航空ページェントに — 出現した UFO —



北海道航空協会主催 2018 年 8 月 12 日 (日)

撮影時間 14 : 46

撮影地点 札幌市東区丘珠町 316-1
(丘珠空港北東周辺)

カメラデータ

: フジフィルム Fine Pix HS 30EXR

: F/8 1/750 ISO 100 48mm

撮影者 h. Nunokawa

※本航空ページェントのラストを飾った F16
(青森県三沢米空軍基地所属) が同空港の
滑走路上空を北西から南東へデモフライン
ト中に出現した UFO

14 枚連写した中のファーストショット



Aerospace News Agency Sapporo



Website : <https://aerospacenews.org/>

E-mail : info@aerospacenews.org